

『わかれ道』の周辺

——人物形象化と虚実の背景——

木村 真佐幸

—

『わかれ道』は、明治二十九年一月四日刊の『国民之友』第十卷二百七十七号春季付録に発表された。したがって執筆時期は、以前から腹案があったことは自明のことながら、関良一氏が「一葉小説制作考」（『一葉全集』第七卷昭和31・6、筑摩書房）の中で、「二十八年十二月二十日発の国木田収二の『手紙』によれば、その日にはまだ原稿が社にとどいてゐないが、同二十四日発の『手紙』には『至急御校正被下度』とある。このころは『たけくらべ』（第十三回・第十四回）の執筆と、『わかれ道』・『この子』の執筆との三者が輻湊してゐたのであったが、おそらく『たけくらべ』を例よりもはやく二十日ごろまでに脱稿して『文学界』に送り、『わかれ道』はそれ以前の腹案をもつてゐたのを二十日・二十一日ごろにいで脱稿し、ただちに『この子』にかかったのであろう。」と述べているように、やはり、二十八年の十二月二十日ごろと考えて間違いない。

ただ、本稿のねらいが、『わかれ道』執筆日時の吟味、確証に置いてあるわけではなく、『わかれ道』がいわゆる「奇跡」の十四か月」の終章期の執筆であることを重視し、そのために人物形象化の諸要因に、一葉の心情の傾斜がこれに大きく左右している点を視野に含んで置きたいと考える点にある。

ところで、今日、この「奇跡」の期間云々は、一葉文学研究上、避けて通れないことは言うまでもない。だが、世に奇跡的なことばはあっても、実態としての「奇跡」は在存しないだけに、一葉「晩年」の集中執筆と、その意欲をいわゆる「奇跡」なることばに吸収包含して、問題点を拡散、抽象化することは厳に慎まなければならないであろう。

もちろん、私は「奇跡の十四か月」なることばを軽視するものではない、否、むしろ、自明のことながら、一葉が市井作家としての文学的転機、確立を結果した『大つごもり』から、『たけくらべ』を文学界に分載しつつ、一方、『軒もる月』『ゆく雲』『うっせみ』、そして問題作の『にぎりえ』『十二夜』『この子』『わかれ道』、はたまた未完とはいえ『裏紫』等々と、まさしく一気呵成に集大成したことは、なんといってもそれこそ「奇跡」としか形容し得ない心情に傾くのは当然である。

それだけに、繰り返しになるが、この『わかれ道』の執筆が、一葉の命脈幾何もない「奇跡の期間」の終極的段階であることにこだわり、一葉の創作主体、執筆意図の分析解明を試みたいと考えるのである。

二

『わかれ道』の主人公は「お京」か「吉三」か——については様々の議論や意見がある。まず、松坂俊夫氏の「一葉小説の構想とその展開」(「樋口一葉研究」昭和45・9、教育出版センター、「増補改訂樋口一葉研究」昭和58・1)ならびに

「樋口一葉『わかれ道』考」(「山形女子短期大学紀要」昭和59・3)等々、一連の論考に詳しいし、近くは河村清一郎氏の『わかれ道』(「国文学解釈と鑑賞」昭和61・3)、そして滝藤満義氏の『わかれ道』(「現代文学研究シリーズ17」樋口一葉)昭和62・5、尚学図書)の中で、それぞれ過去の論議の経緯を踏まえ、問題点を的確に整理しているので重複を避けるが、問題は『わかれ道』なる題名に象徴される一葉の創作意図は何かは、本稿の論旨と関連が深いので再確認したい。

この点について橋本威氏が『わかれ道』の題意は、「まず〈別れ〉の意であり、お京の立場から言えば、吉三と〈別れ行く道〉の意」(『わかれ道』論——発想の視点から——)(「梅花女子大学文学部紀要18」昭和57・12)で、さらに「お京にとっての、人生の〈岐路〉の意を含んでいるであろう」(前掲)と述べ、また、松坂俊夫氏も『わかれ道』という題名は、別れ道という意味と同時に、あるいはそれよりも深く岐路の意味を表明」(「樋口一葉『わかれ道』考」(「山形女子短期大学紀要第十六集」昭和59・3)と、橋本説を大前提として直視ながら、さらに「岐路」を強調した視点がある。

これに対し、各論として具体化したものに河村清一郎氏の卓見がある。それは、「お京と吉三との姉妹のような親しみを描き、そこに孤独な、恵まれぬ者同志の愛情のぬくもりを捉えたあと、一転して二人の別離を描くところにこの作品の主題が集約されるとすれば、そこにお京の変容を中心とする、もう一つの主題が説明されなければならないことになる」(「わかれ道」国文学解釈と鑑賞、昭和61・3)とする。では、もう一つの主題とは何か——。同じく河村氏のことばを借りると、お京の妾奉公の決意は、「見せかけの華やかさとは裏腹に、女心のはかなさやあわれさをものぞかせた。このようなお京の変容を描くことこそが、作者の目指したもう一つの主題であり、むしろ中心主題であったのではないか」(前掲論文)とみる正鵠を衝いた新見は注目しなければならない。

ところで、『わかれ道』にみられる意外な明るさを指摘する論もある。それは、吉三がお京の妾奉公に対し、「お廃しよ、お廃しよ、断っておしまい」の必死の叫びに、「でも、吉ちゃん、私は洗い張りにあきが来て、もうお妾でも何でも宜い、何うで此様なつまらないづくめだから、いっそ、その腐れ縮緬着物で世を過ごそうと思うのさ」のお京の自棄的発言は、「自分の人生をすっかり割り切っているお京だけに、この作品から読者の感じとる気分はむしろ明るいのである。」(村松定孝「評伝樋口一葉〈作品と作家研究〉」昭和42・12、実業之日本社)がすなわちそれである。

また、松坂俊夫氏も、「お京に『人生をすっかり割り切』らせ、もしくは、不遇な人生に居直って生きる女性を描いたのは、『にぎりえ』のお力に、暗くつきつめた孤独感、絶望感を存分に書き上げた後だったからであろう」(樋口一葉『わかれ道』考(前掲論文)と、奇跡の期間)における先行作品執筆との関連の指摘がある。

だが、問題は「むしろ明るい印象」を与えなければならないほどの「暗くつきつめた孤独感、絶望感」とは一体何んであったのか。また、一葉をしてこのような作品をものせざるを得なかった極限意識、はたまたそれを「明るさ」にまで昇華し、止揚しなければならなかった作品構成の裏側にある一葉の不透明な精神構造はどのようなものであったのか、ということも作品理解の一視点として注視しなければなるまい。

既に触れたように、『わかれ道』の構想がやや早くから考えられていたことは、未定稿の草稿群からも想像に難くない。だが、成稿は意外に短時間で一気に書き上げたと考えられることも可能である。もし、このように、推敲時間が短かいとするならば、一葉の作家的姿勢の断定には早計があるとしても、反面、人間として、また女性としての一葉の偽わらざる真情の吐露の極めて色濃い作品ということは当然、考えてよいはずである。一般的にみても、執筆時間にゆとりがある時

は、スタート時の構想と脱稿時では、いささか趣きを異にすることがある。私は以前、『雛鶏』と『たけくらべ』の位相（「一葉文学成立の背景〈第七章〉昭和51・11、桜楓社）に触れたことがあるが、自明のことながらその写実性と詩的抒情性には、相当の距離があることを認めなければならなかった。ましてや、『わかれ道』は「お京の妾奉公への決意、ないし選択がすでにあきらめであり、ここから先きはどのような展望も開けて来ない。いわば、行き止まりの世界」（河村清一郎氏、前掲論文）であって見ればなおさらであろう。（ま）

では、作者一葉の極限化された孤独感、絶望感とはどういうことか。

四

再び、「奇跡の十四か月」の終章期へ視線を移して考えてみたい。先に結論の一端を述べるならば、この時期、一葉の胸中深く沈潜し、覆い尽くした意識の澱みの一つは、何んといっても「死」との対峙であったろう。「死」は、生ある人間がすべて避けることのできない宿業である。そしてこれは個々人の「死」への意識と、また置かれた周辺状況によって相違があることも事実である。例えば、不治の病に直面している人や、身近かに肉親を亡くした人を除く多くの人は、死は観念としてのそれであろう。だが、一葉は違う。

周知のように一葉は、長兄、そして父の死による悲しみ苦しみを体験している。しかも、一葉、十五歳の折の長兄泉太郎の死因は肺結核。この伝染病への恐怖感と世間の冷やかな視線は、およそ現代の比ではない。一葉の手記に、「思ひ出る明治廿年七月の頃なりけり。我兄ふと病にかゝりぬ。」とあり、その年の九月十七日、泉太郎は外出先で大咯血、その後、重態をつづけ、遂に同年十二月二十七日、二十四歳で夭逝した。この「二十四歳」の意味は重い。

わが国の結核は、明治・大正・昭和と過去数十年にわたってその死亡率が人口一〇万対一〇〇をはるかに超える統計がこれを裏付けている。一九〇〇年は人口一〇万人対一六三・七、一九一〇年は二三〇・二、一九一八年は二五七・一、特に二十世紀のはじめ、東京・大阪・京都の大都市では一〇万対三〇〇の様相を呈していた。このように明治から大正にかけて、さらに第二次世界大戦の後半は、結核が死亡原因の首位にあったことは記憶に生々しい。たしかに、わが国では明治二十五年、北里柴三郎による伝染病研究所の開設、こと結核に関しては一八九五年（明治28年）ドイツのレントゲンによるX線の発見、その翌年、この装置は日本にも輸入された。だが、BCGの発見も一九〇八年（明治41年）であり、日本における結核予防協会の設立が一九一三年（大正2年）、さらに結核予防法制定が一九一九年（大正8年）、そして一九四八年（昭和23年）、ようやく満三十歳未満の全国民は年一回ツベルクリン反応検査を受け、陰性および疑陽性者はBCG接種を受けるよう定められ、これが翌一九四九年（昭和24年）七月から施行、次いで触れると一九五一年（昭和26年）に新しい結核予防法が制定され、結核医療費が公費負担となり、かくしてこの世界での「近代化」の兆しがようやく見えてきたということになる。

いささか脇道にそれたが、これは当時の伝染病「結核」の厳しさと、一葉の苦悩を改めて再確認したかった謂に他ならない。したがって一葉も、長兄泉太郎と屋根を同じくするだけに、感染経路として最も危険度の高い空気感染——いわゆる飛沫核感染に脅えることを余儀なくされた。加えて、これに追い打つをかけたのが明治二十七年七月一日の従兄幸作の死である。「十時頃成けん、桜木丁より使来り、幸作死去の報あり。母君驚愕、直に参らる。からはその日寺に送りて、日ぐらしの烟とたちのぼらせぬ、浅ましき終りを、近き人にみる。我身の宿世もそゞろに悲し。」（傍点稿者）。そして翌二日、「早朝、母君およびおくらと共に、日ぐらしに骨ひろひに行く。山川程を隔てたる叔甥のおなじ所に烟とのぼるは、こも、のがれぬ宿縁なるべきにや」（傍点稿者）と日記に書き記るさざるを得なかった。

この時、一葉の脳裏には、七年前の長兄の死が鮮烈に、しかも悪夢として蘇ったに相違ない。明治十年十月四日付の「太政官命達第二十五号」〈墓地及埋葬取締規則〉第三条によれば、「死体ハ死後二十四時間ヲ経過スルニ非サレバ埋葬又ハ火葬ヲナスコトヲ得ス。但別段ノ規則アルモノハ此ノ限ニ在ラス」とある。また、明治十七年十一月十八日、内務省達乙第四〇号一九年甲第五号、大正元年第二十二号改正の「墓地及埋葬取締規則施行方法細目標準」第六号には、「火葬場ハ人家及民家輻輳ノ地ヲ隔ル凡ソ百式拾間以上ニシテ風上ニ位セサル地ヲ撰ヒ火炉煙筒ヲ備ヘ臭煙ヲ防クノ装置ヲナシ且周圍ニ塀牆ヲ設クヘシ。但山林原野等ニシテ人家ヲ隔タル場所ナルトキハ格別ナリトス」。さらに第七条に、「火葬ハ成ルヘク日没後之ヲ行フヘシ」とある。

以上の規則からみて、幸作が二十四時間を経ずしてその日の中に「日ぐらしの烟」となったのは、「別段の規則」に該当するいわゆる特殊な病気——つまり、伝染病であることが肯づけられるし、骨拾いに一葉の母と幸作の妹のくらが早朝云々とあるのも、特殊な病気であっても「火葬ハ日没後」に従ったものと想像される。

だが、問題は一葉の日記の、稿者傍点の部分である。「我身の宿世……」といい、「のがれぬ宿縁……」云々は一葉にとって観念の世界ではなかった。つまり、これは過酷なりアリズムの内患に他ならない。それは何か。一葉は「萩の舎」でこれに関係する体験がある。師の中島歌子の母幾子が病の床にあり、神田区西紅梅町二の佐々木医院、佐々木東洋医師のもとへ、その薬をとりに行ったことが日記にある。また、来診の記録もある。一葉の余りの肩凝りを心配した佐々木医師が、「この肩凝りが下へおりたら命とりだ」と注意を促した事実があっただけに一葉の懊悩は簡単ではない。因みに、体の不調を訴える苦悶の記録を日記から拾ってみると、明治二十五・二・二十一、同七・二十三、同八・二十四、八・二十九、九・一に散見し、「我脳痛いとげし。水にかしらあらひ、はち巻などす」。そして明治二十六・二・六「著作のこと、このころままならず。かしらはなはだいたみに痛みて何事の思慮もみな消えたり」。二・二十一、「脳の痛みたへかたくして、一

日うち臥したり」。つづいて四・二十五、五・二十一と頭痛、肩凝りの苦衷の記録が各所に散見し、『結核』の予兆におののく一葉の姿を垣間見る。

五

長兄泉太郎の死は、いま一つ一葉の人生岐路を決定づける要因が介在した。それは、一葉が樋口家の女戸主として家運を支える重要な責務を背負わせられたことである。時に兄泉太郎の死から約三か月後の、明治二十一年二月二十二日、一葉、一七歳の折である。ここで、一つの疑問に逢着する。それは、一葉には次兄虎之助がいるという事実である。それにもかかわらず、なぜ一葉が戸主なのか。その理由の外的要因は虎之助が明治十四年七月十八日、分籍しているからである。だが、分籍とは一応の名目で、実質的には『勘当』といっても過言ではない。ここに、以後の一葉の精神構造、生活史を形成する内的要因が潜んでいる。

周知の通り一葉の両親はその昔、安政四年四月、郷里を出奔。以後、苦節十年、粒粒辛苦の末、莫大な金を使って南町奉行所配下の同心、浅井竹蔵の株を買って待望の武士になった。しかし、その半年後の慶応三年十月十四日、徳川幕府は崩壊した。一葉の両親にとっては、まさに槿花一朝の夢であり、その落胆は言語に絶するものがあつたろう。結局、両親の期待は子供たちに向けられるのは当然の帰結であるはずだ。長男泉太郎は明治法律学校（現・明大法学部の前身）を経て大蔵省へ。泉太郎は一時、関西での新計画で身を立てようとしながら、これが失敗に終わっただけに、大蔵省出納局配賦課雇の辞令は両親の愁眉を開くのに充分であった。だが、約半年後の十一月二十七日、既に述べた結核のため退職を余儀なくし、一か月後の十二月二十七日、死亡。

ところで、いま一つ、一葉文学の背景として看過できないことがある。それは、先の武家政治崩壊との関連であるが、樋口家の「俄士族」問題である。武家政治崩壊後の明治二年に、一般武士が士族に、下級武士が卒と身分的階級化されていたものが、同八年に「卒」も士族に昇格した。この「士族意識」、換言すると旗本直参の「亡霊」は、一葉にとって時には家名尊重のバックボーンとなって文字通り身をそぎ骨を削って文筆活動に渾身の力をふりしぼり、名作を生み出す原動力にもなったことは事実である。だが、反面、過酷な重圧を結果したことも否定できない。両親は悉く、この失われた過去の虚名妄想に執着した。特に母多喜は、夫則義の死後、これが極端になって一葉の心を暗くした。その「亡霊」の犠牲者の一人が先に触れた次兄虎之助の「勘当」である。つまり、陶器の画工、芸術家肌で「正常」な生活になじまない虎之助は、旗本直参の士族の家柄に心しくないとかどである。女戸主樋口奈津（戸籍名）は、以上のような複雑な要因を水面下に揺曳させ、時には不協和音の渦の中での誕生ということが言える。そうして、このことは渋谷三郎側からの婚約破棄、はたまた半井桃水をめぐる恋の苦悶と訣別の大きな要因としてこれを浸触していくことになるのである。

六

明治二十六年二月十五日、一葉はその日記に自らの戒名を書きつけている。これは一体何を意味するのか。今日、僧籍以外の人でも、生前に己れの戒名を用意する話をまま聞くが、これを即、当時の一葉に被して考えることは必ずしも適當ではない。私は、ことさらこの問題を過大視し、針小棒大する気持ちは毛頭ない。だが、これを一葉の単なる戯事と一蹴するにはいささか躊躇らわざるを得ない。仮にこれが一葉の衝動的行為であったとしても、それには何らかの要因が内在しているとみるのが自然であろう。

「落花枝に返らず破鏡再度てらさず。四大破れて五蘊空に帰す。魂魄天地に消散して冥々朦々たり。今汝何に依りてか此世に執着を止めんや。一心の迷妄に引かれて永く地獄に墮落し剝焼舂磨のくるしみを受けんや。速に悪念を去て成仏得脱をとげよ。則ち汝を法通妙心信女と名付く、喝。」

以上、日記の文言からも読みとれるように、花は落ちると再び枝にもどることができないし、割れた鏡は二度と姿をうつすことのないように、万物必滅の世になぜそのように俗事に拘泥執着するのか。とにかく一刻も早くその俗念を断って成仏得脱を遂げよ……と自分を厳しく責めている。これらの点に関連して、一葉の小説にはしばしば月が出ることから井上ひさし氏は、「一葉の月は死の世界の象徴」(〈頭痛肩こり樋口一葉〉昭和59・5、座)で、つまり、「月はこの世界とあの世の通路。彼岸と此岸を連結する穴。その穴からあなたへ一葉の亡霊を指す」(木村注)はこの現世を観察していたのである」(樋口一葉に聞く)前掲文)は、井上氏の鋭い作家的嗅覚と、その立体的表現から種々考えさせられることが多い。

幸佐真 木村 さらには、この「法通妙心信女」の意味するものについて、東京・本郷五丁目にある、一葉はつゆかりの法真寺住職伊川浩永氏から示唆を得た。ただ、当方が門外漢でこの分野の知識が乏しく、伊川氏の適切な助言を消化していないことを省みなければならぬが、とにかく、一葉が記録した戒名の意味は、日記に記された「落花枝に返らず……」以降の精神を要約したものとのこと。いわゆる俗念を棄てて自然の流れと和合すべく「得脱」し、その上で「成仏」をと、自らを戒る意

ととれるし、また、この十五日の日記の前文に、「衆議院上奏につきてかしこき詔勅」云々や、「さるは其内廷の費を減じさせ給ひて、六ヶ年の間三十万円づゝを年ごとに、軍艦製造費のうちを下させ給はんの御ことのりに、誰かは涙ふるひて喜ばざらん」等々の国情や社会の諸様相の後に、突如として「落花云々」の唐突感は否めなかったが、伊川住職の示唆によれば、この二月十五日は釈尊入滅の日であり、したがって関係寺院においては、仏陀入滅の相を描いた涅槃図を掲げ、釈尊の遺徳奉讃追慕のための涅槃会が行われていたはず。また、「喝」も、当時、一葉の住居、菊坂地域に長泉寺、喜福寺

といった現在にもつながる禅宗の寺があり、これらからの間接的影響も考えられるかもしれない等との御指導を得た。

以上のように、この「喝」はもともと禅宗における引導の諷誦文にある。一葉はわが身への自戒をこめて文字通り「喝」を入れたことも視界に含んで考えることも必要であるし、「詳細は後述する」そして、いささか短絡飛躍であるが、桃水の眠っている駒込吉祥寺の養昌寺は曹洞宗であることの関連、また、一葉が通学した吉川学校も禅宗系であるだけに、何らかの関係があるかもしれない。さらに、「萩の舎」の中にも影響を与える関係者の有無等々の示唆は、周辺状況として今後調査を続けたいと思っている。

一方、一葉の先祖と宗旨との関わりである。一葉の祖父八左衛門は、甲斐国山梨郡中萩原村字十郎原（明治に入ってから大藤村中萩原、現在は山梨県塩山市中萩村字中萩原）の浄土真宗万福寺檀那で、しかも直参門徒である。また、父則義も（当時は大吉）も白巖和尚に師事していたことなどから考えても、一葉は父則義から自らの立志の経緯等も含めて、直接間接に影響を受けたことも想像できる。

ついでに触れると、則義は、待望の幕臣になった時、浄土宗に転じたが、明治に入ってから東京府の社寺掛として勤めたその折、本願寺の檀家になった。そのようなわけで、樋口家の墓所は築地本願寺の寺内にあったが、関東大震災後、現在の杉並区和泉町和田堀廟所に移したものである。そして、すぐ近くが甲州街道というのも何か因縁めいた感がなくもない。

以上のように涅槃会の二月十五日、一葉の周辺を襲う不協和音のため、無意識の底辺に潜む多くの苦悶が、この涅槃のことばに内包する、いわゆる本能による精神的動揺の超克を希求し、平安の心情をねがう一葉が、ふと心の句読点として「成仏得脱」に傾き、特に人間存在の特質を、無常・苦・無我と規定するこの仏教という人生観の出発点にすがりたい心情からの「戒名」であったのではないか。

そして、特にこれらの心境を切にこいねがう一葉の苦悩と迷いは、文筆による生活経済の自立の困難もさることながら、さらに深刻な苦悩の谷間にある心の慟哭は、言ってみれば桃水との訣別そのものではなかったかと思うのである。

七

先にも一部触れたように、明治二十六年二月六日、一葉は「著作のこと、こころのままにならず、かしらはただいたみに痛みて、何事の思慮もみなきえたり。」と、その苦悶が日記の行間を埋めている。確かに、かしらの痛いことは余りにも多すぎた。特に、一葉の胸中覆う大きな心の痛みは何んといっても桃水の問題である。そして同時にこれは、一葉の文筆活動……ひいては生活経済にも連動するだけに悩みは尽きなかった。

木村 幸真 明治二十四年四月十五日の桃水訪問、そして半ば押しかけの入門以来、複雑に揺れ動く日々の連続であった。同年七月、桃水の妹幸子と女学校の同級で、桃水の家に下宿していた鶴田たみ子の妊娠出産への誤解……特にこの辺から桃水と一葉の歯車は複雑な様相で軋み出した。そもそも恋は不条理な感情の渦巻である。そして、多くは必ずといっていいほど嫉妬という醜いものがその裏に潜む。鶴田たみ子問題も不幸にして誤解のまま一葉は短かい生涯を閉じた。それは恋愛の図式を文字通り地で行く一葉であって見れば、これも結果としてやむを得ないとも言える。

ましてや恋愛の心理構造が、二人の閉鎖的世界から出発し、昂じてこれが相手によって己れを変質されるだけに事は深刻である。加えて能動性と受動性という対極の要因が同時進行する。言ってみれば永遠に未完でゴールがない。しかもここには論理がないし、付帯価値も必要としない。

ところが、一葉の恋には、この付帯価値がつきまとうので一層複雑に錯綜する。それは、生活経済の確立——文筆によ

る収入の確保が必要条件となってしまう。桃水は一葉救済のための同人誌「武蔵野」の刊行、あるいはライバル紙ともいえる読売新聞の紅葉の助力を仰ぐ画策等々、一葉のために骨身を惜しまなかった。「武蔵野」は二号でつぶされたが、読売の紅葉入門は「萩の舎」で桃水との噂話のもとで友人伊東夏子、師の中島歌子に詰問され、一葉の方から断らざるを得ず、言ってみれば自ら墓穴を結果した。

また、恋の閉鎖性は余人の介入を許さないだけに、事、相手の問題に対しては独断と偏見を招来する。一葉は、「鶴田たみ子」問題だけでなく、桃水が結婚したとさえ一方的に早合点した。二十五年の十二月三十一日、ライバルの三宅花園の斡旋で、「都の花」に掲載された「暁月夜」の原稿料を得たことの報告を含め、桃水の許へお歳暮のあいさつを予定した。当時、桃水も文筆だけでの生活保証が厳しく、「松禱軒」という葉茶屋を営んでいた。桃水の店近くまで足を運んだ一葉は、「年わかき女の美しき髪などもかざりて、下女にてはあるまじき振舞」から、「大人の妻君なるべし」と勝手にきめ、あまつさえ「持参金にて嫁入せし」云々と憶測し、揚げ句の果てには腫を返すに至っては、何おか言わんやの感を否めない。この女性は、桃水の従妹で未亡人の河村千賀子、正月をひかえ、片づけを手伝いに来ていたのが実情である。

ここで、注視すべき要因がある。それは、桃水がいくら健康を害していたとは言え、桃水ほどの立場の人間でも、文筆一本での生活確保は困難を垣間見た一葉の衝激である。桃水を美化し、理想化していたといっても、一葉の視界の中では桃水が目標であっただけに、この事実は重い。

明治二十六年二月六日、先の「かしら……」云々の末尾に、「我れは営利の為に筆をとるか、さらば何が故にかくまでもおもひをこらす。得る所は文字数の四百をもて三十銭にあたひせんのみ。家は貧苦せまりにせまりて、口に魚肉をくらはず、身に新衣をつけず、老たる母あり、妹あり、一日一夜やすらかなる暇なけれど、こころのほかは文をうることのなげかはしさ。いたづらにかみくだく筆のさやの、哀れ、うしやよの中」は、文筆による生活方途の困難を痛感しての嘆きで

あり、先の桃水の「葉茶屋」生活が陰に陽に投影していることは疑えない。一葉は、恋の対象としての桃水、そして桃水を通しての文筆生活の実像から目をそらし、虚像の美化という視座から、漸く生活実態に根をおろす厳しさをつかみかけたといえる。そしてこれは、とりもなおさず、文学の世界、作家姿勢に置き換えてみても、浪漫性から写実主義的内実を加える胎動の萌芽に一步踏み出したことを物語るといってよからう。

明治二十六年三月三十日の日記に、「我家貧困日ましにせまりて、今は何方より金かり出すべき道もなし。母君は只せまりにせまりて、我が著作の速かならんことをの給ひ、(略)かかる佗しき目見んよりは、よし十円取りの小官吏にまれ、かた擲はなさぬ小商人にまれ、身のよすが定まれば憂き事はしらじなどの給ひなすこと、いと多し。」とあり、著作収入も継続性に乏しく、生活困窮の極が日記の各所を暗くしている。このような現実からも、やがて商売への転進、「大音寺前」転居は確実に醸成されていったと言える。

木村 だが、母多喜のいう「小商人」云々は額面通り受け取ることはできない。一葉は前述の日記の続きに、「不孝な子にならじとは日夜におもへど、猶かかる御心にも入らずして……」と苦悶を繰り返している。「不孝な子」とは何を意味するか。生活窮乏……もちろん、言うまでもない。だが、問題は従兄同様の西村釧之助や、郷里の広瀬猪三郎が営んでいる商売への方向転換は、既に触れた旗本直彦としての士族のプライドが許さない。士農工商意識、「俄士族」の「亡霊」に妄執する母多喜からみれば、この「小商人」の言は皮肉中の皮肉に他ならないのだ。

一方、一葉もこれへの逡巡は決して単純ではない。両親が武士への飛躍のために、偽の家系図を作成し、そのために村民救済者の祖父八左衛門をすでに亡き者にしたり、莫大な金を動かしての士族の株の「買収」等々まで知悉しない一葉であつても、事、「母君は、いと、いたく名をこのみ給ふ質におはしませば、児、賤業をいとなめば、我死すともよし、我をやしなはんとならば、人め、みぐるしからぬ業をせよとなんの給ふ。そも、ことわりぞかし。我両方は、はやく志をたて

給ひて、この府にのぼり給へば成けぬ」(明治24・9 〓 傍点稿者)の一文ですべてが言い尽くされている。したがって多くの説明を要しないが、「賤業」、すなわち「賤しい仕事」とは何を指すかに敢えて触れるならば、これは「土農工商」的発想の謂である。母多喜のいう「小商人」は、言ってみればこれに該当する。

いま一つは、一葉のプライドは、母のそれとはいささか趣を異にするが、やはり、「萩の舎」の仲間の視線を十二分に意識している。だが、さらにこの転進に対する心の重圧は、桃水との訣別の決定打を意味することを一葉が最も承知している。生活方途の確保は、商売しかないという認識に到達しても、この現実化には約四か月の時間を要した。資金、場所、方法等々多くの選択と決断が必要であつたらう。だが、一葉の迷いの最たるもの——繰り返すが、これは桃水以外の何ものでもない。

八

一葉にとって桃水との訣別は、人生の重大転機を意味するだけに事は深刻である。たしかに、桃水との出会いの目的は小説家志向であり、これによる生活経済の確保にあつた。それは「萩の舎」の姉弟子田辺花圃が、逍遙の推薦により「都の花」へ「藪の鶯」を執筆して三十三円二十銭という多額の原稿料を得たこと、また、二十五年十二月二十八日の日記に記される一葉、十六歳の折の体験からも疑う余地がない^{まご}。そして、また、文学活動はある意味では論理である。一葉は、桃水の作品に対して、「桃水うし、もとより文章粗にして、華麗と幽邃とをかき給えり。又みずからも文に勉むる所なく、ひたすら趣向意匠をのみ尊び給ふと見えたり。」(明治26・2・23)と、桃水の作家としての弱点を厳しく剔抉できる一葉の目がないわけではない。もちろん、これを一葉の心情の傾斜とすることもできる。だが、先の「戒名」問題の直後であ

るだけに、日記という自己投影の特殊世界へ、桃水との訣別、そして自立への自己叱咤、文字通り「喝」を入れた虚実の交錯も全面的に否定はできない。とはいえ、一葉の批判は、桃水文学、そして作家姿勢の一端を衝いていることは確かなのだ。

だが、人間心情の揺れと屈折は、理屈や論理では片づくものではない。否、己れの心の傾きを否定すればするほど、心の句読点としてわが身を顧る時、自己欺瞞と虚実の相克が逆に浮き彫りされ、その葛藤の増幅は避けるべくもない。「萩の舎」の仲間、田中みの子が、桃水の『胡沙ふく風』を貶なした時、それに異議を唱え、反論した。しかし、その日記には「そも当れる説にはあらざりけめど、とまれ、完美の作にはあらざるべし。いでよしや此小説うき世の捨てものにて、人の為には半文のあたひあらずともよし。我が為生粹の友これをおきて外に何かはあらん。」(26・2・23)と心情的揺蕩の自己照射、その反作用の実態が、ここでも如実に示されている。

幸佐真 村 木
そして、この日、桃水は『胡沙ふく風』を贈るべく一葉宅を訪問した。桃水の来訪に対し一葉は、「其人なりと聞くままに、胸はただ大波のうつらん様成て、おもひがけずもただ夢とのみあきれにけり。立出て門のと開けて、例のもの静かに立入る姿、うれしなどはしばし心地さだまりての後こそ、何事も靄の中にさまよふ様なり。」と、周章狼狽の心情が活写されている。その夜、「此書をひもといて、暁のかねひとり聞」き、「引とめんそでならなくにあかつきの 別れかなしくものをこそおもへ」と、偽らざる真情を吐露し、桃水との訣別……という事前の決意も、現実の桃水の前ではこれがいかに無力であるか、換言すると単なる夢に過ぎないことを身をもって知らされた一葉の愛の軌跡の一側面が、その外形と内実の距離を以って物語っている。

明治二十六年七月五日の日記に、一葉は「恋」の深淺、極致とは何か——について長々と書き記した。生活方途の打開策の多岐選択が閉された一葉であってみれば、あとは決断以外には残された道はなかった。そういう意味からもこの日記の一節は極めて重要である。すなわち、桃水との訣別に迷う心の屈折に、一つの決定的楔を打ち込もうという、やや、凄絶にも似た決意のほどを想像するに吝でない。その一部を紹介すると、「見ても聞ても、ふと忍び初めるはじめ、いと淺し。いはでおもふ、いと淺し。これによりおもひ、かれよりもおもはれぬる、いと淺し。これを大方のよには恋の成就とやいふらん。逢そめてうたがふ、いと淺し。わすられてうらむ、いと淺し。逢はんことは願はねど、相おもはん事を願ふ、いと淺し。相おもはんを願はず、言出んも願はず、一人こころにこめて一人たのしむ、いと淺し。」と列挙し、これらは「淺き恋」であってその極致にあらずとしている。

さらに、古今集「読み人しらず」の「名取川瀬々のうもれ木あらはれば」の一節を引用し、その意味する埋木が水がれで現われるように、二人の浮名が世間の噂となって、しかも名譽を汚す結果になることに頭を悩す云々の歌意を敷衍しながら、その延長線上に、「うきに過たる年月のいつぞは打とけてとはかなきをかぞへ、心はかしこに通ふものから、身は引はなれてことざまに成行、さては、みさを、守りて百年いたずらぶしのたぐひ、いづれか哀れならざるべき。されども、これらは恋に酔ひ、恋に狂ひ、此恋の夢さめざらん中に此夢の中に死なんとぞ願ふめる」。しかし、一葉はこれも「思へばいと淺き事也」とこれも一蹴している。しかし、そうは言いながらも「されど、浦山しきは此さかひ成るへし」と包み込むことも忘れていない。では、「まこと入立ぬる恋の奥に何物かあるべき。」に対し、「もしありといはば、みぐるしく、にくく、うく、つらく、淺ましく、かなしく、さびしく、恨めしく、取りつめていはんには、厭はしきものよりほかあらん

とも覚えず」と、人間の抱くあらゆる情念をいささかヒステリックに奔騰し、ここではじめて、恋の極致は、「あはれ其厭ふ恋こそ恋の奥成けれ」……と述べている。以上のような「厭う恋」に到達せざるを得なかった一葉の心の變を考えると、この問題は、やはり、桃水抜きには語れない。

二十七年七月二十七日の日記に、たった一言、「晴れ。金策におもむく……」と点線で余韻を残し、その成否の記録はない。多分、不首尾に終わったと推定できるし、しかも、一葉の日記の中で、金策成否の点線は二箇所しかないだけに何か息苦しい。多分、記録することすら躊躇らざるを得ない対象だったのではなからうか。そして翌々日の二十九日、遂に最後の決断の時を迎えた。「此夜、一同熟議実業につきかんことを決す。かねてよりおもはざりし事にあらず、いはば思ふ処なれども、母君などただ嘆きになげきて、汝が志よわく立てたる心なきから、かく成行ぬる事とせめ給ふ」。反復の必要もないかと思うが、母多喜の「嘆き」は「士族」から「商人」への落魄意識にほかならない。そしてこの、「実業」なることばの力みに、かえって哀れみさえ誘われる。

七月三日、一葉と母は、同郷の、広瀬猪三郎の案内で浅草方面へ「家さがし」の行動を起こしている。つまり、七月六日に一葉が書き記した先の「厭う恋」は、以上のようなリアリティの延長線上にあることを考えれば納得がいく。つまり、桃水に対して、やや、一葉の一方的姿勢の感が強いこの恋は、いってみれば、長男の桃水、女戸主の一葉、あるいは鶴田たみ子問題、桃水結婚説等々多くの制約や誤解の上であったとしても、やはり、一葉にしてみれば愛の苦悶、苦業を経てようやく到達した悟道、諦観に近い世界であったのではなからうか。視点を変えれば、まさに宗教の世界、先の戒名、そして「喝」そのものではなかったか。とは言え、一葉はこの後に、「いとふ心のふかきほど恋しさも又ふかかるべし」とつけ加えている。さらに、「人をも忘れ、我をも忘れ、うさも恋しさもわすれぬる後に、猶何物ともしれず残りたるこそ此世のほかの此世成らぬ。かゝるすえにすべてたのしなどいふ詞を見出づべきにもあらず。さればくるしといふ詞もなかるべ

き筈と人いはんなれど、その恋あればこそ世にたゞよふなれ。捨てたりといへど五体うごめき居らむほどは、此苦も又はなれざるべし」。そして結びに、「仏者の仏となへ、美術家の美となふる、捨て捨てすてぬるの一物やこれ。」

一葉は「恋の極致」を「厭ふ恋」と断定しながらも、一方、人間世界にはこのような恋があるからこそそれを追い求めつづけるのであり、たとえ、その苦しみや喜びを「捨て」去っても五体が生を保っている以上、この苦悶からの脱却は不可能であると述べる。菊池寛がいう「恋は憂患多し、されど恋なくば猶憂患多し」の言よろしく、所詮、一葉も人の子に他ならない。

特に結びの「捨て捨て」の反復は、進退極まり断崖絶壁に立っての絶叫の感さえある。桃水との訣別、そして一葉の転機は昭和二十六年七月二十日、下谷区竜泉寺町三百六十八番地、通称「大音寺前」転居がそれである。この転居の理由、そして『たけくらべ』成立の関係については、拙著『一葉文学成立の背景』第六章「『たけくらべ』成立の背景——『大音寺前』転居をめぐる——」で触れたので重複を避けるが、論の展開上、転居前日と、その当日の日記の一部を記したい。

七月十九日、「今宵は何かむねさわぎで睡りがたし。さるは新生涯をむかへて、旧生涯をすてんことよこたわりて也」。つづいて転居後の二十日には、「唯かく落ちはふれ、行ての末にうかぶ瀬なくして朽も終らば、つひのよに斯の君に面を合はする時もなく、忘られて、忘られはて、我が恋は行雲のうはの空に消ゆべし。昨日まですみける家は、かの人のあしをとどめたる事もあり。まれには、まれまれには、何事ぞの序に、家居のさまなりとも思ひ出で、我といふものありけりとだにしのばれなば、生けるよの甲斐ならましを。行ゑもしれずかげを消して、かくあやしき塵の中にまじはりぬる後、よし何事のよすがありておもひ出られぬとも、夫は哀れふびんなどの情にはあらで、終に此よを清く送り難く、にごりににごりぬる浅ましの身とおもひ落され、更にかへりみらるべきにあらず。かくおもひにおもへば、むねつとふさがりていとどねぶりがたく、暁のくる、はやう聞えぬ」。

いささか引用の長きにわたったが、この一文で桃水への感懐、遠望の情、衝動的行為に対する悔恨、自己卑下、自己流謫的心情をはじめ、一葉の懊悩がすべて言い尽くされているので敢え引用した。

人間は往々にして感情の赴くままに、しかも衝動的に行動することがある。一葉の転居もいささかそれに近いところがある。母多喜は山の手を望み、そして探索した。それは、「幾そ度おもへども、下町に住まむ事はうれしからず、午後より更に山の手を尋ねばやといふ。」十五日の日記にある。理由は、「庭のほしければなり」である。生活破綻者の母親が、依然として士族の「亡霊」につきまとわれ、見栄の塊りである。一葉は、そういう意味から肉親が存在しても、実質的には精神的孤児とさえいえる。

幸佐真 村 木
一葉は無意識の中に、母の願望志向と反対の下町、しかも人肉の街、吉原に足を向け、ここを居所と定めた。これはなぜか——。詳細は前記拙著で触れたので省略するが、日記の字面からも解るように、納得しての選定でなかったことだけは間違いない。衝動はまだ定着以前であるが、生活はリアリティが伴う。そして、事の重大さに気づいて愕然となることがある。一葉は、桃水に対し、一言のあいさつもしない。だが、一葉はこの日の日記からその題名を「塵の中」としている。これは心の家出であり、桃水への当てつけである。しかし、この「大音寺前」体験が一葉をして自立を促し、社会の底辺に生きる人間の姿をこの目で見、やがて社会の諸々の矛盾に目を開くいわゆる「写実主義作家」樋口一葉の誕生と、今日なお、評価のゆるがない名作、問題作執筆の遠因が形成されたのはまことに皮肉な結果という他はない。

一〇

一葉後期文学、そして「奇跡の十四か月」を考える上に、いくつかの要因がある。中でも既に触れた一葉を襲う「死」

の問題と、「久佐賀義孝」問題を除いては語れない。

久佐賀問題については、「後期一葉文学の一側面——久佐賀義孝問題の再検討——」（『藤女子大学国文学雑誌』第13号、昭和48・3）ならびに、拙著「一葉文学成立の背景」（昭和51・10、桜楓社）等に、昭和三十年の半ばから十数年の調査をつづけた資料を添付して発表してあるので、ここでは重視を避けたい。だが、『奇跡の期間』に描かれた多くの問題作は、この久佐賀問題が陰に陽に影響を及ぼしていることを重視することでは、今もその考えは変わらない。

一葉が「大音寺前」から、いわゆる終焉の地になった丸山福山町四番地（現・文京区西片一丁目十七番地）の居所選定の意図には、久佐賀の存在を意識してのそれである。この場所は、菊坂の一葉旧居まで徒歩で一〇分足らず、さらに久佐賀の真砂町も鐘坂を登り切ったところで、これより数分の位置で指呼の間である。そう意味から一葉の作品執筆のラストチャンスを全うするための経済援助者、つまり「出世払い」よろしくスポンサーの獲得は、一葉の生活構造を決定する上からも最大の関心事であり、必須条件であったはずだ。

もちろん、中島歌子の「萩の舎」助教、そして後継者の夢も無関係ではない。だが、「萩の舎」からの手当が月二円、しかし、家賃三円は余りにも無謀という他はない。それは、既に幾つかの機会で触れたように、スポンサーの人選、そして二月二十三日、「秋月」と偽名しての久佐賀訪問、その後の久佐賀の梅見および富士見楼への誘い等々から、久佐賀の邪心、下心、俗物性を見抜き、時には、「体」交換条件提示に対して、一応は「痴れ者」と憤怒しつつ、片や伏字をしての思わせぶりの返章から、スポンサーは久佐賀以外ないという必死の対応がこの辺の事情を裏つける。

もちろん、当初は、各新聞に散見する久佐賀の誇大にして、かつ説得力に富む広告に魅せられ、「相場」も一つの方法と考えたことは確かであろう。だが、所詮、自己資金ゼロでの対応では選択肢はない。結局、すべてにわたっての経済援助を久佐賀に期待することが前提とならざるを得なかった。そして、この辺の事情と経過は、久佐賀訪問当日の約三七〇〇

字に及ぶ一葉の日記文と、以後の手紙のやりとり等々が迫真性をもって物語る。

久佐賀は、全国に二、三万の会員を擁し、時の農商務大臣後藤象二郎夫人もその後ろ盾であり、いわゆる海千山千の男である。それだけに伊達や酔狂では金を出すとは思われない。必ず、成算の見通しを得てから行動するはずである。だが、一葉は、時にはその久佐賀を手玉にとって翻弄している。二十七年のくれに、一葉は千円（現在の約一千万円をはるかに超える額）の援助を申し込んでいる。久佐賀もさるもの、千円どころか五千円でも都合するが、さしずめ、「毎月交はりの情」を以って「月に十五金位ひ」はどうか……といった緩急自在の対応である。これに対し一葉も、「私は女なれども御はなしの上の片腕にも成るつもりにもこれあり候決して御遠慮なくおもふ事もさせてをかしき事よの中について御（二字不明、たとえば「秘密」などか）など守れとならば随分人にもらさぬ私に御座候……」の対応のしたたかさもみごとという他はない。拙著で私は一葉のこれらの対応ぶりを「精神的娼婦」と形容したことがある。これは一葉非難のそれではなく、断崖に立たされた一葉の必死の孤絶を想定しての謂である。

木村真佐幸
とところで二十八年四月二十日の日記に、「小石川けいこ也。早朝、大橋君来訪。日没近く家にかへれば久佐賀来訪。西村君もありけり。久佐賀ぬしと共に夜ふくるまでかたる。金六十円かり度よし頼む。」とある。いささか唐突感を否めないが、この六十円の借用については、結果的には久佐賀の関西旅行のため不首尾に終わった。だが、旅先からの久佐賀の手紙が気にかかる。それは、「小生は本月二十六日出発只今弊地に滞在中にて兼て御約束之通り当底帰京覚束無し……されば来月下旬か六月頃にならざれば帰京出来難きと相考へ候故に兼て御依頼の全件は今度丈けは脇方に御繰り替へ被下度委細は追て帰宅之上夫々御面談申上候也」（傍点稿者）とある。

この「今度丈けは脇方」云々をどう解釈すべきであろうか。まず、従来は都合できなかったが、帰京後は都合するので「今度丈けは」が一つ考えられる。だが、これは、先の「夜ふくるまで語」った経緯や、前後の文脈からいささか不自然で

ある。やはり、今迄は都合したので、目下、旅行中につき「今度丈は脇方に御繰替へ被下度……」とすると条理が整う。しかも、四月二十日の懇談、そして久佐賀の出發は二十六日、久佐賀にその意思があれば不可能ではない。加えて一葉は五月一日、久佐賀に「金子早々にとたのみやる……」と督促している。そして「午後、久佐賀から書あり……六月末ならでは帰宅すまじとの事。さては留守へ文さし出したる事成しと笑」い、「金子の事、さらばむづかし。」と嘆きの一文がある。

事の経過からみても、久佐賀は一葉に対し期待に応えるニュアンスを含んでいたとみて間違いない。だから、一葉の催促となつたはずだ。してみると、一葉の明確な記録はないが、久佐賀から然る可く金を引き出していたとみるのが至当ではないか。それなのに、久佐賀は今回、なぜ、一葉の期待に応えないのか。端的に言って旅中でリアリティが伴わないとみるのは余りにも牽強附会と言ふべきであろうか。一葉は、この久佐賀からの返事到着の日、「浪六のもとへも、何となくふみいひやり置しに、絶て音づれもなし。誰れもたれも、いひがひなき人々かな。三千金、五千金のはしたなるに、夫すらをしみて出し難しとや……」と、憤満やる方ない心情を日記の誌面に吐き出している。

ところで、この時期における一葉の文筆活動はどうかというと、周知の通り、前年十二月に『大つごもり』をものにし、引つづき「文学界」に『たけくらべ』を分載、五月の時点では第八章——つまり、作品の前半が掲載済みである。一方、『ゆく雲』の起稿、『軒もる月』を「毎日新聞」へ、そして、周辺状況としては博文館主大橋佐平の女婿、大橋乙羽（編集長格）の出入り、野々宮きく子の同僚で女子高等師範学校教員安井てつ（哲子は後、東京女子大学長）、俵田初音が一葉へ入門、時には「源氏物語」なども講じている。したがって外形的には、ある意味での活況を呈しているといつてもよかつた。もちろん、経済的事情は好転していないことは先の記録からも肯づかれる。だが、それにしても久佐賀に対する執念と、唐突的対応の納得には直線では片づかない距離がある。

明治二十八年五月一日を最後に、久佐賀に関する一葉の記録は影を消す。それは、既に触れたように、久佐賀との対応の現実的メリットの困難さと、ある意味での自己嫌悪が一葉の心情を覆っていたのではないかと想像される。博文館の大橋乙羽夫妻をはじめ、星野天知、平田禿木、馬場弧蝶（九月二十日に彦根中学へ赴任するが）、そして川上眉山等々の交流を得、経済的安定には未だ程遠いにしても、雰囲気的活況は事実であった。それだけに、一葉の胸中に鬱積して払拭し得ない心の傷と汚点は、久佐賀問題への嫌悪感ではなかったか。

その後、『にぎりえ』、『十三夜』の好評に伴い、文字通り実質的スポンサーがあらわれた。経済援助、別荘提供、歓迎会等々、大阪の上野山仁一郎、そして西村兄弟の関係者で、しかも匿名者の松木某らがそれである。一葉は「さらば、老親に一日の孝をもかゝざるべければ」ということで、「一月の末に二十金をもらひぬ」とあるだけで、これらの協力援助をまづは全面的に辞退している。一葉は、「ひいきの角力に羽をりを投ぐる格にやとをかし。」と述べ、また、二十九年一月六日の日記にも、「こぞの秋、かり初に物しつるにぎりえのうわさ、世にかしましうもてはやされ、かつは汗あゆるまでの評論などかしましき事よ。十三夜もめづらしげにいひさわぎて、女流中ならぶ物なしなど、あやしき月旦の聞えわたれる、こころぐるしくも有るかな。（略）友のねたみ、師のいきどほり、にくしみ、恨みなどの、限りなく出来つる。いとあさましう情なくも有るかな。虚名は一時にして消ゆべし。一たび人のこころに抱かれたるうらみの、行水の如く流れさらんか、そもはかりがたし……。」と書き嘆いている。だが、この年の十一月二十三日、死を結果する一葉であってみれば、すなわち一葉の名のみで簡単に片づく問題ではない。

『にぎりえ』が好評で、しかも『十三夜』の増刷、だが、名声とは一体何なのか。経済生活のリアリティは伴わず、生活

は一向に好転の保証もない。あるのは師や友の憤り、ねたみ、恨みのみ……。『名声』とは、かくも虚しく現実性希薄なものなのか。加えて、一葉は、時々刻々、己れの運命が迫ってくることに視線を避けるわけにはいかなかった。したがって、先の経済援助、しかも協力者の善意をさりげなく辞退したのも、結局、長兄泉太郎の「死」の軌跡を、いま、自分がこれを確実に歩んでいることと、従兄幸作の死の折に思わず洩らした「のがれぬ宿縁」が間近かに迫ったことの認識に他ならなかったろう。その意味から、これら協力者の期待に応え得ることのかなわぬ自分、換言すると『汚名』のみを残すことを潔ぎよしとしない一葉の意地とプライド……。それこそ旗本直参の士族意識がこの極限において、ものの見事に『結晶』したと言えるのではなからうか。

一一一

『わかれ道』は、以上のように一葉を取り巻く暗く、しかも逃れ得ない不協和音の延長線上においての位置づけを考えると、ある程度納得がいく。とりわけ、お京の辛奉公の決意は、お京を姉のように慕う吉三の叫びを振切った選択は諸説にあるように、やはり展望の開けて来ない「行き止りの世界」そのものであるはずだ。では、読者に与えるある種の明るい印象云々の点は、例の「思ひ切った事を我れ知らずに言っ**て**ほ**っ**と笑ひしが……」（傍点稿者）の「ほっ」に象徴暗示されるように、選択の余地の全く残されないお京の諦念と自己正当化——そこには迷いと苦悶の極を経てようやく到達した人間のある種の冷徹な自己凝視……そんな悟りにも似た一葉の心境がお京に仮託されていたのではなかったか。

人間は往々にして死が近づくと本能的に何かが見えてくるという。それは私欲や煩惱が滅却され、澄み切った心の目で対象を冷静に凝視するの謂であろうか。だが、先に触れたように、今、確実に「死」と対峙せざるを得ない一葉にとって、

久佐賀問題は一体何をもちたのであろうか——。拙著で私は、「一葉は当初、久佐賀を通じてある『大望』を意図していたと考える。その『大望』とは何か——。それは一大長編か大作をものして、天下国家を論ずる——そんな『氣負』があったのではなからうか。ところが明治二十七年六月九日を契機として、久佐賀の俗物性を見抜き、それ以後はむしろ久佐賀の意図に迎合するような『媚態』を示して少しでも多くの金を引き出すべく方向転換があったのではなからうか——」と書いたことがある。『世直し』的『大望』の実現——このような自己正当化、自己陶醉がなかったならば、二十三歳の娘一葉が、『精神的娼婦』よろしく久佐賀と丁弁止渡り合えるものではない。しかも、「死」の意識がこれを倍加し、文字通り「死」をかけての捨て身の戦法であったはずだ。だが、死を一年後に残した一葉にとって、この不如意な経過と結果をもたらした久佐賀問題の心の処理は一体、何が残されているというのであろうか。

一葉の作品には、当然のことながら自己の体験が下敷になっていることが多い。もちろん、直接体験は自明のことながら、間接的、精神的体験も、時には諸々の形に変容してこれが作品のテーマに、あるいは人物造型に、そして構図展開へと陰に陽に託されている。したがって、この久佐賀問題の光と影は、一葉の『後期文学』の中でいろいろと投影されているのは周知の通りである。その最たるものは『わかれ道』であることは今さら言うまでもない。そこで、多面的視点からの分析と照射が必要になるが、今、作中人物の形象化の中で、「吉三」について焦点を絞って考察を試みたい。

「お京」と「吉三」の擬制的姉弟の関係という構図に加え、私は既に拙著「樋口一葉」（昭和55・2、桜楓社）の『わかれ道』の注釈で、「吉三」が「お京」の妾奉公の噂に対し、「お京」弁護のための大喧嘩をやった場面について、「……『吉三』の『お京』への感情の傾斜は、『姉』のように慕うにとどまらず、ひとりの女性に対する心情が『妾』云々によって一挙に噴出したものと思われる。」と記し、また、「『己れも傘屋の吉三だ女のお世話には成らない……』の部分については、『ここで『吉三』は『お京』をはじめ『女の……』と表現したことに注意。今まで『姉』のように慕っていたのは表面の

こと、妾 になる『お京』を『女』として意識……」と触れたことがある。これは注釈であり、しかも脚注、限定されたスペースで自ずと字数の制限は避けられず、ポイントのみで説明不足は否めない。だが、一葉は、「吉三」の人物の形象化には「お京」をひとりの女性として十分に意識すべく人物造型した点を主張したつもりである。それは何故か。

まず、「吉三」の年齢が十六歳という点である。この年齢設定は、これ以上でも以下でも不適當である。それは、「吉三」に二つの要因が仮託されなければならない。一つは、「お京」との関係においては、いわば擬似的姉弟の様相であって、相思相愛ではない。それだけに「お京」の妾奉公の噂をする「半次」と大喧嘩をやってのけ、「お京さんばかりは人の妾に出るやうな腸の腐ったのではない……」と言わせるある種の「純情少年」「吉三」でなければならない。だが、一方では、妾 のなんたるかを知らない『たけくらべ』の「正太郎」的年齢では困るのだ。やはり、横丁組の子供大将、「頭の長」で仁和賀の金棒に親父の代理を勤め、時には遊廓から平然と朝帰りをする十六歳の「長吉」的存在をかねそなえた人物設定でなければならぬはずである。加えて「吉三」は、「長吉」と同様に、いや、それ以上に「己れは傘屋の吉三だ」と啖呵をきる職業人としてもプライドを持つ独立した一個の人間でなければならない。作家一葉の創作主体に視座を置いて考えると、繰り返しになるが、先の「お京さんばかりは人の妾に出るやうな腸の腐ったのでは無い……」と、純で一途な、そして「お京」を異性としても慕う「十六歳」「吉三」に叫ばせ、それをまず久佐賀問題に被せて払拭し得ぬ「汚点」と自己嫌悪の心情を拡散させる……これが『わかれ道』の人物形象化の大いなる要因ではなからうか。

本稿は、標題にも記したように、『わかれ道』の周辺とそれに至る作家の創作主体の側面に重点を置いた。したがって、この延長線上における作品論は何れを稿と改めて筆をすすめ、その責を果たしたいと考えている。

注(1)

「お京」の妾奉公の決意ないし、選択の「行き止りの世界」という考え方の他に、「出口あり」の見方もある。たとえば小森陽一氏の、『にぎりえ』のお力にしろ、『十三夜』のお関にしろ、設定としては「出口なし」という形です。でもこの『わかれ道』はある意味で「出口あり」というか、お京は仕事師として、女として自立して生きていく、ということとは可能なわけですね。そして傘屋の吉三がこだわっているのも、この部分なんです（略）『わかれ道』というのはお京の選択した生き方であり、それについて一葉は吉三側からはっきり拒否しているんじゃないか、という気が僕はするんです。（共同討議「樋口一葉の作品を読む わかれ道」、国文学解釈と教材の研究、昭和59・10）の発言もある。また、司会の山田有策氏は、「小説の作り方の問題でいえば、こういう形で突き出してしまったあと、作家一葉はこれ以上は踏み出せないという絶望も僕は感じてしまうのです。

だから僕は彼女は決して天逝の作家ではないと思う。生ききってしまった作家だと思ふ。二十四歳ですけど、別に途中で倒れたわけではなく、完成して終わってしまった、という感じがする。そういう意味で、作品論的に希望があり、出口があるようではないながら、作品の作り方みると、ちょっと無理だな、という感じがする人です。（前掲共同討議）がある。そして、さらに、これに関連しての小森氏の発言等がつづき、それぞれ示唆される点が多い。

注(2)

かつて一葉は、法真寺の東隣（本郷六丁目五番地）に、四歳から九歳まで住んだことがある。明治九年から十四年がすなわち、それである。一葉は、明治二十九年の夏、病床での記録の中に往時を偲び、「かりに桜木の宿といはばや、忘れがたき昔の家にはいると、大いなるその木ありき。狭うもあらぬ、庭のおもを、春はさながら打おほふ計咲みだれて、落花の頃は たたきの池にうく緋ごひの雪をかづける けしきも をかしく 松楓のよきものあり しかど これをば庭の光にぞしける。」とある。

また、『ゆく雲』の中に、「上杉の隣りは何宗かの御梵刹おぼさまにて、寺内広々と桃桜いろいろ植わしたれば、此方の二階より見おろすに、雲は棚洩く天上界に似て、腰衣の観音さま、濡れ仏にておわします。御肩のあたり腰のあたり、はらはらと花散りこぼれて、前に供えし櫛しきの枝につもれるもをかしく、下ゆく子守りが鉢巻の上へ、しばしやどかせ春のゆく衛えと舞ひくるもみゆ。」と記されており、作中の「濡れ仏」は現在、法真寺本堂左横に鎮坐する露坐の観音像がそれである。

注(3)

明治二十五年十二月二十八日の日記の一節に、「……車にて本両替町の書籍会社に行く。直に藤陰に会ひて暁月夜三十八枚の原稿料

十一円四十銭うけとる。」の後に「つづいて、「十六斗の時成し、九十五の銀行に処用ありて此前を通りしに、洋服出立の若き男立派なる車に乗りて、引こませしを見し時、天晴れ、美ごとや、彼れは大方若手の小説家などにて、著作ものゝことに付き此家に出入する人なるべし。三寸の筆に本来の数奇を尽して、人に尊まれ身にきらをかざり、上もなき職業かなと思ひし愚かさよ。」とある。この記録について野口碩氏は、「明治二十年ごろ。「十六斗」とあることから、一葉十六歳はすなわち明治二十年のこと（稿者注）夏子が小説家に憧れたのは、必ずしも、花圃（田辺）龍子の『藪の鶯』の感化によるものではないことがわかる。』（『全集樋口一葉』第三巻脚注、昭和54・12、小学館）というユニークな説があることを参考にした。

付記(1)

本稿中の「結核」ならびに「伝染病」についての歴史的経緯、また、「墓地及埋葬取締規則」に関する諸資料については、本学医務室勤務の宮澤禮子氏、そして本学卒業生で札幌市役所勤務の増田到氏のご教示ならびに資料提供にあずかるところが大きかった。ここに記して謝意を表す。

（一九八九・四・一〇稿）

付記(2)

本論を脱稿の後、高田知波氏の『『わかれ道』の位相』（『駒澤國文』第二十五号）の惠贈を得た。先行論文を精致に分析整序し、その延長線上での新見、卓説がみられ多くの示唆を得た。次稿の折、紹介し、参考にさせていただこうと思う。